



Takatsuki Arts Theatre



劇場は、人が生きて、動いている。
そこに無二の価値がある。

彫刻家 名和晃平 インタビュー



高槻城公園芸術文化劇場

Takatsuki Arts Theatre

劇場は、人が生きて、動いている。 そこに無二の価値がある。



PROFILE 名和晃平 (なわこうへい)

1975年、大阪府高槻市生まれ。彫刻家。京都芸術大学教授。
京都市伏見区にクリエイティブ・プラットフォーム「Sandwich」を構え、彫刻の枠を軽やかに越えた表現に取り組む。
京都市立芸術大学大学院修了後、英国ロイヤル・カレッジ・オブ・アートに留学し、ニューヨークやベルリンでも活動。
銀座メゾンエルメスやドイツ、オーストラリアなど世界各地で個展を開き、アジアン・アート・ビエンナーレ最優秀賞
など国際的評価も高い。公園や施設のパブリックアート、人気ミュージシャンのMV、近年は舞台芸術まで、多彩な
コラボレーションを通して生命や宇宙のつながりを探る。



A
B
C

「そうそう、猫の表紙ですよ。猫、楽しみにしていました」・・・
開口一番、本誌TATを手にとった名和晃平さんは頬を緩めます。高槻市
富田町の出身。「高槻にこんな劇場ができたんですね、どの辺ですか？」
と高槻城公園芸術文化劇場にも興味津々。地元トークも弾むなか、
お話を伺いました。

大都市のざわめきの中に、海や森の静けさの中に――
名和晃平さんの作品は、いまや国内外問わず、さまざまな場で息づいて
います。最近では大阪・関西万博のパブリック・アート、2023年にフランス・
セーヌ川の中州に公開された高さ25mの大型作品、2018年、パリ、ルー
ヴル美術館での特別展示も話題になりました。公園や施設など誰もが
自由に観覧できる場所に置かれた作品も多く、知らず知らずのうちに作
品を目にしているかもしれません。



E



F



G



D

A : Foam, installation view: "AICHI TRIENNALE 2013," 2013, Aichi, Japan,
Courtesy of Aichi Triennale 2013 and Sandwich
B : "PixCell-Deer#52," installation view, photo: ©Yosuke Kojima
C : "Throne," installation view, "Japonismes 2018: les âmes en resonance," 2018,
© Pyramide du Louvre, arch. I. M. Pei, musée du Louvre, photo: Nobutada OMOTE
D : "Ether (Equality)," 2023, courtesy of SCAI THE BATHHOUSE and Pace Gallery,
photo: ©Gérald Le Van Chau
E : Trans-Mio, 2024, photo: Nobutada OMOTE
F : Fu/Rai, 2017, collection of CONRAD OSAKA, photo: Nobutada OMOTE
G : Ether (Octagon), 2020, photo: Nobutada OMOTE



A



B

出会いから30年、 田中泯さんと舞台づくり。

——彫刻作品に留まらず、近年の名和さんは、舞台芸術の領域でも新風を巻き起こす勢い。2024年には、ダンサーであり俳優としても活躍する田中泯さんとの舞台作品「彼岸より」を上演しました。泯さんとの出会いは30年前になるとか、きっかけは？

「泯さんとの出会いは、大学1年の時。鈍行列車で10時間かけて出かけた山梨の《白州アートキャンプ》でした。数週間滞在して、ダンサーや建築や演劇や音楽の人たちと、農業をしったり、家畜を育てたり。泯さんたちは土にまみれて、体つきや皮膚の色も違って見えましたね。畦道で踊るダンサーに付いて、観る人も移動するとか。土を掘って、その中でダンサーたちが踊る。それをみんなが地上から観劇するとか。奇想天外な舞台表現を目の当たりにしました。数年間は通ったと思います。僕が個展を開くようになってからも、泯さんは展覧会場に来てくださっています。2021年にSCAI THE BATHHOUSEで開催した個展「TORN-SCAPE」を見に来てくださった時、泯さんが、『俺、ここで踊りたいなあ』と言って、映像作品の前で「場踊り」をされました。「場踊り」は見せるためのショーではなく、「その場」が踊りになる。それがのちの舞台「彼岸より」につながったと言えますね。彼岸と此岸のあわいを描くように、彫刻やさまざまなマテリアルを使った舞台イメージを提案して、泯さんがそこに身体で反応していく。そんな感じで一緒にディテールを重ねていきました。」

C



劇場はアナログでフィジカルな表現の場。

——名和さんにとって「劇場」の面白さとは何でしょう？

「美術館やギャラリーと劇場は本質的には変わりません。美術館などは“ホワイトキューブ”と呼ばれる白い壁に囲まれた空間ですが、劇場は“ブラックキューブ”に近くて、暗闇から始めることができる。たとえば福山（広島県）に造ったアートバビリオン《洗庭》も、暗闇に光が立ち上がる体験をつくり出しています。暗闇に目が慣れ、人や空間が徐々に見える。その光のコントロールの幅は、劇場のほうが圧倒的に大きい。劇場空間ならではの魅力ですね。」



D

PROFILE 田中泯（たなか・みん）

1945年、東京生まれ。決まった振付やジャンルにとらわれず、本人は「場を踊る」「場所が踊る」といった観点を語っている。近年では渋みのある俳優としても愛され、映画『国宝』にも出演。自然と身体が交わる一瞬を大切に、舞台でも映像でも独自の存在感を放つ。山田洋次監督作品『たそがれ清兵衛』で日本アカデミー賞最優秀助演男優賞、2026年2月には『THEATRE E9 KYOTO』でダンス作品が上演される。



E

——名和さんが、舞台芸術の世界に足を踏み入れたきっかけは？

「振付師・ダンサーのダミアン・ジャレとの出会いでした。彼はベルギー出身なのですが、日本の神話や修験道（山での厳しい修行を特徴とする日本独自の宗教）に強い関心を持っていて、実際に修行も体験されています。そんな彼が、ぼくの作品を観てメールをくれたんです。もう10年以上も前になりますが、そこから「身体を使った表現」を軸に、共同制作が始まりました。一度きりのつもりだったのですが波長が合い、ワークショップを重ねるうちにアイデアがあふれて、気づけば四作目に・・・！たとえば、片栗粉やスライムを使って重力から解放されたような動きを作ったり、水の中にいるような身体感覚を試したり。素材と身体を組み合わせる実験に、音や光が加わって、劇場ならではの表現が生まれました。」

「いま、生成AIがどんどん一般化していますが、AIには肉体がありません。映画界ではコンピュータグラフィックが当たり前。しかし、舞台に立つ人の身体は、AIに置き換えられない無二の存在です。人が生きて、動いている。そこに代替できない価値がある。生身の身体は圧倒的な情報を抱えています。これからも劇場は、アナログでフィジカルな表現の場として、想像力を広げる場になってほしいですね。」

PROFILE ダミアン・ジャレ

1976年、ベルギー生まれ。振付家、ダンサー。オペラや音楽ビデオ、ハリウッド映画の振付けも手がける。2017年よりナショナル・ユース・カンパニーのアーティックディレクターを務め、2011年以降は日本にたびたび滞在し、名和晃平との共同制作を重ねる。今年11月には『ロームシアター京都』で二人のコラボレーション作品『Planet[Wanderer]』を上演。

G



F

ロサンゼルス の展覧会に向けて、 今、考えていること。

——現在、ロサンゼルスでの個展の準備中。時代に浮遊する空気をどのように感じて、作品に投影しようと考えているのでしょうか？

「次の構想は、漂流物のオブジェクト化。日本は“島”の集合体で、外からさまざまなものが流れ着きます。私たち日本人はそれを受け入れ、文化に変えてきました。こうした“島国ならではの特異性”に関心を持っています。視点を広げれば、地球そのものも宇宙を漂う“漂流物”。人類はその不安定な惑星で、どうやって存続していくのか。そのとき浮かび上がるのが二つの方向性です。ひとつは「天へ伸びていこうとする力」、もうひとつは「大地に還ろうとする力」。僕は、その中間あたりに人間らしい健全さがあると考えているんですね・・・どんな個展になるかはお楽しみに。」

A/B/C：彼岸より, 2024, Yamanashi Prefectural Citizen's Culture Hall, Yamanashi, Japan, ©Min TANAKA | Kohei NAWA, photo: Yoshikazu INOUE

D：洗庭/KOHTEI, 2016, Shinshoji Zen Museum and Gardens, Hiroshima, Japan, ©Sandwich Inc., photo: Nobutada OMOTE

E/F/G：Planet [wanderer], 2021, photo: ©Rahi Rezvani





名和少年の想像力育んだ、 地元・高槻の夜空のこと。

——名和さんは、どんな環境で育ちましたか？

「父は、小学校の教師をしながらも、「子どもの遊びと手の労働研究会」、通称「手労研（てろうけん）」という活動をしていました。既製のおもちゃではなく、身近なものを使って自分でおもちゃを作ることを子どもたちに教えていたので、家の中にはいろんな材料が集まっていたね。ものをつくるという行為が、日常の一部になっていたことは間違いありません。」

——愛犬のビーグルとお散歩した高槻の町も、名和さんの心の土台。遊び場は、如是や津之江の辺りだったとか？

「小学5年生の頃、友だち3人と“天文研究部”をつくって、毎日のように夜に津之江公園のグラウンドに行きました。夜、眠れない子どもだったのと、あまり家にもいたくなくて、天文研究部なら堂々と夜、外に出られると考えたのです。万博の大屋根リングみたいな堤防に囲まれたグラウンドで、天体観測にはぴったり。流星群がやってくる夜には、寝転がって星を数えました。冬は魔法瓶に紅茶を入れて持って行って、朝まで空を見上げたことも。遠くのものすごく近くに感じられる天体観測のレンズ体験は、現在の作品づくりにもつながっています。」



高槻城公園芸術文化劇場が、 次なる創造の場となるように。

高槻城公園芸術文化劇場は、北摂最大級の1505席のトリシマホール、音の響きの良い太陽ファルマテックホール、高槻初の本格的な演劇・ダンスに適したサンユレックホールのほか、音の響きの良さに定評のある北館中ホールを含め、4つのホールを備えています。また、南館には中小10のスタジオがあり、楽器練習や演劇練習、アート作品の展示など、利用者がクリエイティブに活用できるよう工夫されています。「そのスタジオ、ぜんぶ稼働しているんですか？素晴らしい！！舞台の幅はどれぐらいですか？ダミアンとの作品も上演できるかな・・・」劇場にもいたく感心をもっていただけた様子。やがて、記憶は少年時代に遡り、「高槻城公園芸術文化劇場」の前身「高槻現代劇場」の思い出話となりました。

「地元の僕は、現代劇場と呼んでいたんですが、小学校か中学校のときだったと思うのですが、友達とジャッキー・チェンの映画の試写会に行ったら、上映中に突然フィルムが燃えたらしく、場内に「一度止めます！」という声が出て、燃えたのも見えた。それにすごく感動して。しばらくして再開したんですが、僕が気になったのは映画よりも「どうやってフィルムを直したのか」という点。あの時、映写室で何が起きていたのか。帰宅後、父にいろいろ質問したのを覚えています。もし、38年前のあの日を覚えている高槻の方がいたら——ぼく、その場にいました(笑)。」

のたれ死んでもいいから、 自分の探求を続けたい。

——今年、50才を迎える名和さん。その節目に思うことは？

「1975年生まれて、親が全共闘の世代なんです。僕が高校生の頃には、全共闘の世代が変えられなかった日本という、やるせなさが社会に残っていて。それと、バブルで調子に乗っている大人を冷めた目で見ていた。レールに乗って競争に勝ってあれか、と。僕は、絶対に敷かれたレールに乗りたくなかった。のたれ死んでもいいから自分の探求を続けたいと思っていました。それで選んだ道が、一番何の保証もない美大であり、彫刻の道です。50才になった今も、日々アイデアが浮かんできます。僕の作品は、実験や検証に時間もお金もかかるので、やりたいことが追いついてないフラストレーションはありますが・・・(笑)。生涯をかけて、自分にしかできない表現を探し続けたいです。」

あの日、名和少年が見あげた夜空の先には、いまなお尽きることのない問いと探究が広がっているようです。



これまでの
舞台EVENT
紹介

全館まるごと、芸術の舞台へ。

高槻城公園芸術文化劇場はホールを使った本格的な舞台公演からスタジオで気軽に参加できるイベントまで、多彩な舞台芸術と出会える場。あなたの好奇心を刺激する、新しい舞台をぜひ観にきてください。



撮影：引地信彦

KAAT神奈川芸術劇場プロデュース 「ジャズ大名」

筒井康隆の奇想天外なコメディが舞台になって高槻に。舞台の上に城を建て、時代を越えてジャムセッション！千葉雄大さん、藤井隆さん主演で俳優・ダンサー・音楽家が入り乱れ、圧巻のフィナーレへ。

会 場：トリシマホール（1,505席）



スタジオに“やぐら”が出現！ 「劇場オープンデー」でダンス企画

中スタジオ3の特徴はフロアを突き抜けた高い天井。空間を活かして“やぐら”を建ててみんなで盆踊り！照明や映像も使ってお祭り空間に。

会 場：中スタジオ3



観客も演劇に参加！ 劇団壱劇屋のイマージブ演劇

地下フロア全体を劇場として、観客も物語に巻き込む演劇。水をイメージした空間で、赤い糸を持った出演者と観客が共演する演出も。今年12月の公演では全館が舞台に！

会 場：南館地下フロア全て（写真は中スタジオ1）



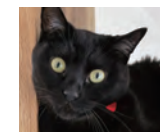
毎年恒例の演劇イベント 「高槻de演劇」

市民劇団の公演等を中心に展開する演劇事業。2025年度は美術家・竹内良亮による舞台美術作品を展示。本作品で上演を希望する団体の公募企画も実施し、次年度公演予定。

会 場：サンユレックホール（最大168席）

今号で個性豊かな表情を見せてくれた猫たちを紹介

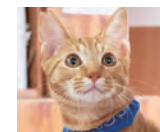
猫たちは保護猫カフェCherishに協力していただきました。保護猫に興味のある方は直接お店にご連絡ください。



ごん ♂



りんたん ♀



茶ちゃ ♂



わらび ♀

登場する猫たちは保護猫カフェCherishの協力

Cherishは常時約30匹の猫を保護。猫を譲り受けたい人に飼育方法を伝えるほか、丁寧に聞き取りを行い相性を確認して猫たちとの出会いをサポート。猫に癒されるに來るだけでもOKです。



猫とふれあって
楽しんでいただくことが、
保護活動につながります。
店長：橋本彩葉さん

■譲渡型保護猫カフェ Cherish

OPEN: 12:00～20:00、土日祝10:00～20:00 定休: なし
住所: 高槻市北園町19-16 タムラビルII 3F
TEL: 072-668-1122

詳しい料金は右記
Webサイトへ

※来店時はマスクと靴下を着用
※土日祝は混雑が予想されるため予約がおすすめ



高槻城公園芸術文化劇場は こんな風にも使える！

スタジオの申し込み方法

窓口やインターネットでご利用申し込みを
行うことができます ※事前に利用者登録が必要



ダンス・バレエ・演劇などアクティブな活動に使える、身体表現系スタジオ

からだを思いっきり動かせるスタジオを、南館に大小3室。壁面いっぱいの鏡、リノリウムの床、防音、空調を
完備しているから、練習にも集中できます。大きなスタジオやホールでの発表を目指す方にもおすすめ。

中スタジオ3 (南館B1F)



高さのある二重扉スタジオ

天井が高く、のびのび動ける開放感。二重扉
で防音もしっかり。大きな鏡が全体の動きを
映し出し、グループでの練習に向いています。

- 利用料金(1時間につき) 1,210円
- 入室目安人数 22人



「設備が整っていて快適にレッスンができます。
適度に外が見えるので、気持ちよく踊れます」

小スタジオ 1 (南館B1F)



集中できる地下スタジオ

地下にあり静かで落ち着いた空間。壁一面の
鏡で動作をしっかりチェックできます。

- 利用料金(1時間につき) 580円
- 入室目安人数 10人



「日々のストレスも木の温もりを感じるスタジオで
踊ると、心身がほぐれてリカバリーできます」

小スタジオ 4 (南館1F)



自然光が差し込む1階スタジオ

コンパクトながら壁一面の窓があり明るい雰囲気。
カーテンを開けると外光が差して開放感も
増し、軽やかに使える空間になります。

- 利用料金(1時間につき) 600円
- 入室目安人数 11人



「外の景色と太陽の光、気持ちの良いレッスン場。
モダンなカフェも、くつろげる憩いの場です」

「やってみたい」をチャレンジできる場所！



高槻城公園芸術文化劇場

Takatsuki Arts Theatre

猫たちと紹介するTAT (高槻城公園芸術文化劇場情報誌)

本誌には様々な猫たちが登場します。この猫たちは、高槻に暮らす人の横で
気ままに過ごし、高槻ライフのゆっくりとした居心地のいい時間を表します。



〒569-0077 高槻市野見町6-8

■ 開館時間 9:00~22:00

■ 窓口 9:00~17:15 / TEL 072-671-1061

■ チケット・友の会 10:00~17:00 / TEL 072-671-9999

■ 休館日：月曜日(祝日の場合は翌日) / 年末年始(12月29日~1月3日) ※別途臨時休館あり

■ 駐車場：約150台(南館地下2階・有料)
営業時間7:00~23:00(年中無休)

■ 駐輪場：約330台(無料)(地上約180台、地下1階約150台)

<http://www.takatsuki-bsj.jp/tat/>



高槻城公園芸術文化劇場 情報誌 vol.11 冬号

劇場の英語表記の頭文字を取って「TAT」、「タット」と読みます。
高槻の文化・芸術を発信していきます。

発行日2025.12.1 / 発行(公財)高槻市文化スポーツ振興事業団
制作 ジャム・アソシエーツ株式会社 / 印刷 岡村印刷工業株式会社



Takatsuki Arts Theatre